

ミステリ読書案内

2021. 11. 21 発行元

第297号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

ライト文芸ミステリ最新刊から

最近出版されたライト文芸ミステリの本を4冊取り上げる。「ライト系」と言っても定義が明確なわけでもないの、若い読者向け、キャラクター小説系の本の中から選んでみた。常連作家が中心かな。

新しい作家に手を広げるのは…

私がよく行く新刊書店では「ライト系」の文庫本は一般文庫とは別に区画を設けて並べてある。新潮文庫nex、講談社タイガ、集英社オレンジ文庫、メディアワークス文庫、ポプラ文庫ピュアフルなど。ここに宝島社文庫も仲間入りしているのが面白い。表紙の雰囲気や「ライト系」に見えるのが多いせいかもしれない。でも、角川文庫のキャラクター小説は一般文庫の並びなので、明確

な分けと考える必要はないのかもしれない。

「ライト系」の未読の作家の作品にも手を広げようとするのだが、何の手掛かりもないままに買う決心がつかないことも多い。つい、いつも読み慣れている作家のシリーズものに頼ってしまうのが現状。今回も定番の作家作品が並んだ感じである。読むからには、ある程度のレベル以上の出来で、読みやすく、満足感のあるものを選んでいかなければ…とってしまう。

太田紫織「涙雨の季節に蒐集家は、」

6月に角川文庫から出た本。『櫻子さんの足下には死体が埋まっている』シリーズが完結したので、その後を継いだシリーズかと思っただが、まだシリーズ化になるかどうかは分からないようだ。

主人公は雨宮青音。大学に入学したが、たちまちに引きこもりになってしまった。札幌に戻って気持ちの立て直しをと思っていたところへ、旭川に住む伯父の訃報が届く。孤独に生きていた伯父の葬送を済ませ、その遺品の整理を行うことに。遺品整理士の仕事をしている望春みはるという人物と出会い、子どもの頃、伯父と過ごした思い出が甦り、青音の「自分探し」の旅が少しずつ前進していく話。望春の双子の紫苑という人物が謎を解くポイントになっている。

蒼月海里「稲荷書店きつね堂」シリーズ完結

『幻想古書店』の後を継いでハルキ文庫から出ている『稲荷書店きつね堂』シリーズが完結した。9月に出了る5巻目『ヨモギたちの明日』が最終巻になった。

神社の前にある白狐像の化身である書店員の(少年の姿をした)ヨモギは、店主のお爺さんを助けて今日も仕事に勤しむ。犬神の化身・千牧もヨモギを支えてくれる。少しずつ客足も戻り、お爺さんも店に立つことができるようになってきた。更に商売繁盛の策を練っていたところにシリーズ最大の危機が……。果たしてヨモギはこの難関を乗り越えることができるのか。そしてフィナーレを迎えることとなる。

『書店』シリーズ、今後再スタートはあるのか？

望月麻衣「わが家は祇園の拝み屋さん14」

9月に角川文庫から出た本。シリーズの14巻目。副題として『溪谷に散る紅葉と陰陽師の憂鬱』と付いている。キャラクター小説としての形。

前作で京都に戻った小春と濤人の前に、今度は新たな恋のライバルが現れるという趣向。そのライバルというのは……。そして、京都では心霊スポットを巡りながらネット上に動画配信する人物たちの活動が問題化してきて、多くの人たちの心情を煽り建てている様子が見受けられるようになった。濤人たちは、穢れや不安が拡がる前に対策を取ろうと相談したりする。いつもながらのお馴染みのメンバーが連携を取りながら活躍する流れに。

綾見洋介「その旅お供します 日本の名所で謎めぐり」

昨年9月に宝島社文庫から出た本。綾見洋介は2017年『小さいがそれがいるところ 根室本線・狩勝の事件簿』で『このミス』大賞の隠し玉を受賞した作家。本書は第二作に当たる。「ライト系」と呼べるかどうかは別として、トラベルミステリをここに取り上げるのもいいなと思って、紹介することにした。

パー『トラベラー』の常連客・歴史学者の梓崎が探偵役をつとめる。5つの話が集まった連作短編集の形式になっている。厳島神社、明日香村の石舞台古墳、白川郷の合掌造り、鹿児島出水の白鳥飛来地、秋田大湯環状列石。各地の名所が取り上げられる。もちろん犯罪とは一切関係ない、「日常の謎」にもならないような小さな疑問に答える旅のようなもの。第四話くらいまではアッサリし過ぎて、「高い評価はあげられないな」なのだが、最後の第五話はそれまでの流れをうまく回収してしっかりまとめてある。若い読者が読むミステリとしては及第点をあげられるかなと思う。